

金融腐蝕列島 [呪縛]

—— 映画文学人生論

原作：高杉良	(1999年)「産経新聞」	脚本：高杉良 鈴木智
監督：原田真人	(1999年)	木下麦太
出演：北野浩	役所広司	撮影：坂本善尚
佐々木英明	仲代達矢	音楽：川崎真弘
北野今日子	風吹ジュン	川上多次郎：丹波哲郎
久山隆	佐藤慶	

誰もがこの男におびえていた

原田真人監督の『金融腐蝕列島「呪縛」』は金融バブル崩壊を引起こし、日本経済没落の原因をつくった大銀行の腐蝕ぶりを描いた映画である。

一九九七年、A C B銀行（モデルは第一勧業銀行）に対する東京地検の特別操作からはじまる。危機感を抱いた北野浩（役所広司）など若手四人組が企業再生をめざして、闇社会からの呪縛を打ちきれない旧経営陣を一掃し、最大のガンだった佐々木相談役（仲代達矢）を退陣に追い込む——という筋だ。テンポの早いめまぐるしい展開で、人間関係も複雑に入り組んでいて、何がどうなっているのかよくわからない。

やはり、高杉良の原作を読む必要がある。北野浩のモデルで、第一勧銀の広報部次長として企業再生に努力し、後に作家となった江上剛『非情銀行』なども参考になる。

それでも金融バブルの実態はなかなか理解しにくい。問題の根は単純にモラルだと思う。銀行員のモラルの欠如が不正融資と貸し渋り&貸し剥がしの横行につながり、金融危機を招いた。

不正融資とは、貸してはいけない人、つまり、返済する意志のない人にお金を貸すことだ。借金を返済する意志のない人の代表はヤクザ。一九八〇年代のバブルがはじめて、日本の金融機関がかかえることになった不良債権は総額一〇〇兆円以上といわれるが、その少なからぬ部分が暴力団が



金融腐蝕列島[呪縛]

映画文学人生論

らみとみられている。元警察官僚の宮脇磊介はバブル崩壊後の景気の冷え込みを「ヤクザ・リセッション」と名付けた。

銀行がヤクザにつけこまれる隙をつくってしまったのは主として権力闘争やスキャンダルによる。A C B銀行の場合は、朝日銀行と中央銀行との合併時にさかのぼり、合併推進派が「誰もがこの男におびえていた」という大物ファイクサーの川上多次郎（丹波哲郎）の力を借りたことが遠因だ。川上と歴代の頭取は親交を結び、川上の呪縛は弟子の小田島敬太郎（若松武史）に継承された。

小田島敬太郎は大手証券会社から利益供与、損失補填を受けた容疑で逮捕された闇社会の大物。銀行幹部は面識がないと否定したが、検察の捜査でA C B銀行から株式購入のために巨額の融資を受けていることがあきらかになる。

取調べを受けた久山隆元会長は自殺し、その前任者である佐々木相談役をかばった。佐々木は時効で逃げ切ろうとしたが、久山元会長が北野浩に託した動かぬ証拠により退任に追い込まれた。

北野浩は佐々木の娘と結婚している。映画の発端では佐々木が孫息子や孫娘と遊んでいるホームドラマ的シーンがみられるが、原作にはそんな甘い場面はない。あくまで権力、金力、女へ執着する七十二歳の生臭い老人として描かれている。

かなぶんの呪縛のとけぬ闇の奥